

卷頭言

手塚信吉

一九六三年十月発行の拙著『新しい農業キブツ』本文の冒頭に「今次世界大戦後、雨後の筍のごとく続出した新興民族国家のなかで、中近東の一角パレスチナの地に謎の国イスラエル共和国が誕生したとき、厄介な国際紛争の火種が一つ出来たと思つたが、そのイスラエルにキブツという世界を動かす生活原理の火種が発生していることは全く知らなかった。」と書いてある。

そのキブツを視察して、すっかり魅せられて、キブツの長所を日本農業の改善に役立てようと念願し、同志と共に日本協同体協会を設立して普及に努める一方、キブツ研修生を年々イスラエル国に送り、今日に至っているが、それはあくまで文化交流の範囲内のもので、政治性は全くないものである。ところが、拙著の冒頭に書いた『厄介な国際紛争の火種が』再三発火して中東全体の平和を乱し、純然たる文化交流にすぎないキブツの研修までが、誤解を招く恐れがあるとは、残念に耐えない次第である。

今次突如として勃発した第四次中東戦争は、幸い国連理事国一致の停戦決議を交戦各国とも受諾し、国連緊急軍監視の下に小康を保っているが、占領地帯をめぐる協定打開の困難さを思うと、国際石油戦争ともからんで、紛争解決は日暮れて道とおき感がある。

一方、早くもイスラエル国内でも、緒戦の不手際の責任問題をめぐり、ハト派とタカ派の紛糾が新聞紙上で伝えられているが、これはアラブ側でも一層激しい内紛が予想され、中東紛争の終

第四次中東

着点があるとすれば、結局は米ソの動向次第であろう。永い人類の歴史が立証しているように、国家民族間の戦争は、勝つたら敗ける、敗けたら勝つ。双方ともに悲惨の繰返しにすぎない。アラブとイスラエルの殺し合い戦争は、民族子孫の憎しみ合いを深め、不幸を招くだけである。そんな愚かな繰返しを、子孫永久に禍根を残すよりも、常勝イスラエルから謙虚に平和を提唱し、国連の裁決に任せて譲歩すべきは譲歩し、恒久平和を真剣に考えるべきではなからうか。

十二年前の拙著『新しい農業キブツ』の中でも左の如く私見を書いた。イスラエル国内を視察して、頭の下る思いであつたのは、砂漠を沃野と化した偉業である。神はこの地に於て、ユダヤ民族の繁栄を許し給うであらう。パレスチナの地を祖国として愛着するユダヤ民族こそ、世界中のだれよりも、この地を守る適格者であらう。

そしてユダヤ民族は、その智慧と誠意と体験とを活かして、隣邦アラブ各国を援助して、あの不毛の大砂漠地帯を緑林沃野と化し、パレスチナに幾十倍する中東一帯の開拓に協力することは、イスラエル国の安泰に役立つであらう。「ユダヤ民族の力量をもってすれば、ユーフラテス河の水利用を活用して、一大沃野の実現も可能であり、世界食糧対策の上から必要である。」と書いてあるが、その私見は今も寸分変りはない。キブツ思想もその社会形態も、元来民族も国境も超越して、人類共存の新原理を基底としたのであり、吾々が共鳴したのもその原理によるものであって、対立抗争を常とする武力主義には反対である。

人類は協同体なり。対立や憎悪を捨て、共存共助の友交善隣国となり、大砂漠開発により、貧困飢民を解消し、永久平和を確立して貰い度い。

人間が資本を支配する時代

手塚信吉

キブツはそれを教えている

一、キブツは労働者即経営者

イスラエル労働総同盟、アジア・アフリカ研究所長アキバ・エガー博士は、『人間性回復とキブツ運動』と題した講演の中で次のように述べている。

「資本というものは、元来、より大きな経済発展を達成する目的でつくられたものであるが、時が経つにつれて資本が労働や生産から分離してしまった。

この分離が進むにつれて、資本家と労働者との間に相剋、対立の関係を生じ、それが次第に増大して、労働によって生計を立てている人類の大多数を占める労働者階級と、生産

手段を占有して、自分たちの利潤追求のために多数の労働者を使用する資本家との間に、完全な分裂を生じてしまった。

そして、両者の対立は増々拡大激化し、人間社会の経済活動の目的が、人間の必要を満たすことから、利益を得ることに一変してしまつたのである。この性格変化が左のような結果をもたらしてしまつた。

一、労働者の『労働』に対する考え方が変わってしまった。即ち、労働者が労働から得る創造の喜びを失い、労働を生産のための必要悪とみるようになった。

二、人間による人間の搾取。即ち、少数の資本家が、多数の労働者を搾取すること、は、多数の人間から真の人間性発展の基本条件を奪ってしまうことになった。

三、人間による人間の搾取が、本来あるべき姿の健全な国家形成への道を、中途で阻止してしまい、国民一人一人がもつていよう才能を発揮して、国家の発展に寄与するといふ、本来の道を閉ざしてしまつたのである。

四、この搾取経済は、国内問題だけでなく国家と国家の間にも害毒をおよぼしている。国家間の搾取関係は、植民地主義、帝国主義を生みだし、国際紛争を招き、世界大戦の原因ともなる。

以上のようなことが、人間と人間との断絶をもたらし、人類全体としての調和を奪つて相互共存の社会秩序を乱してしまつた。

キブツ社会の特色は、この資本と労働との間の調和を回復したことである。キブツでは、

すべての生産手段がメンバー全員の共有であり、生産によって得るものはメンバー全員に還元される。そのために資本の誕生によって失われていた労働の尊厳と、労働による創造の喜びとを、キブツの人々は取り戻すことができた。

キブツでは、自分たち自身のための労働に従事し、自分たち自身の生活を計画し、文化や生活を豊かにする仕事に取り組んでいる。即ち、人生における主体性をもつたのである。生産手段のすべてを共同化しているキブツでは、他人を搾取する何ものも私有しない。

こうした社会体制こそが、すべての人間に各々の才能を、その能力に応じて自由に開発したり、発揮し得る機会を保証する根本条件を備えたものである。

キブツ内の仕事の特徴は、農業、工業、教育、行政、福祉、等々規模も大きく、分野も広く、高度に分業化しており、仕事も多岐にわたっている。メンバー各自がその天分、才能を活かした能力を、充分に発揮し得るのである。」

このように、民主主義、新時代感覚に目覚めた青年男女が、キブツに憧れをもつのは、

そのキブツ社会が、人生における主体性を確立しているからである。

二、労働の対立が日本経済の致命傷

不労所得中心の不平等社会日本の永久繁栄を夢みている、資本主義支配階級は気付いていないであろうが、時代感覚に目覚めてきた勤労階級の不平不満は、爆発寸前にきている。労働を対立関係におく、日本の産業労働体制は、時代おくれなのである。

資本とは人間にとって何か。得体の知れないばかりに、人間支配の特権を与えたところに、資本主義経済の罠がある。

人類が資本そのものに生産手段を占有されてからは、その生産手段が進歩すれば、するほど、大多数の国民である労働者は、一個の歯車の役割にすぎない。一種の商品化された主体制のないロボット人間となつてしまつた。こんな罠から解放されないかぎり、主権在民も、民主主義日本も空文にすぎない。

ところが、保守的で無自覚な大半の日本人は、せっかく与えられた主権在民も民主主義の特権も、それを活す努力もせず、何回選挙があつても、改めようともせず、ただ目先の利欲だけに惑わされて、野心家の食物にされ

たり、賃上げ争議におどされたり、搾かつきにおわっている。

それは労働賃金が物価の主要素だから、賃金があがれば物価もあがる。その被害者は他ならぬ、労働によって生計を立てている、大多数の労働者だからである。労働組合の賃上げ運動は物価値上げ運動であつて、天に唾する愚であり、喜ぶものは労働貴族たちだけである。労働者よ団結せよノ団結するほど強くなる。その通りであるが、上部団体の指示に従つて大巾賃金要求を強行した、事業そのものが破綻に追い込まれて、最大の被害者は矢張り、その事業の労働者であつて天唾ものである。

経済界は景気、不景気を繰返す生きものであるから、不景気時に労働争議など強行されたら、すぐ死んでしまふ。それで倒れた中小企業は毎年何万軒に及んでいる。

そんな中小企業が倒れたあとで、必ず景気が回復するものだ。だが死んだ中小企業は生きかえらない。それで馬鹿をみるのも、その事業の経営者でなく、労働者である。即ち天に向つて唾の愚であらう。

自分たちの生活を守るための賃上げ要求は労働者の基本的な権利であるから、必要では

あるうが、天に向つて唾する愚を反省すべきである。仔細に検討してみると、労働争議で甘い汁を吸うものは、上部団体幹部であつて下部組織の一般労働者ではない。労働貴族時代の日本である。

どんな事業でも、健全に発展するには、人間の愛情が要求される。ところが労使対立の激化の中では愛社心は育たない。愛社精神の育たない会社は健全化はない。従つて自分たちの生活基盤である会社の安泰を忘れた、どんな労働運動も、およそ意味がない。

一九六二年十月の昔話であるが、西欧各国の農工関係の現状を視察に行ったとき、サルツギッター製作所のガイゼンベルグ社長と会談の際、労働問題に言及すると「西独にも労働争議もある。だが単なる賃上争議は殆んどない。必ず経営改善とか、幹部不信任などの建設的要求が多い。」とのことであつた。

日本の労働組合も、そこまで成長すれば、だれよりも労働者自身の幸福であらう。労働者が事業経営に関心をもち、永久安泰を考えた上の賃金要求や待遇改善であれば、愛社心が中心であり、信頼関係があるので、妥協も成り立つ。日本の労働争議には、未だそれが

ない、天唾争議が大半である。

国鉄の年中行事、順法闘争なども、国民を巻きぞえにして目的を貫徹せんとする悪質争議であるが、お人良しの国民は直接自分の損失にならないので存外平気である。税金無駄使いの平気な当局も、親方日の丸で呑気なものの、迷惑を被るのは国家と国民だけである。国民の何百万人の足を奪ひ、生産活動を麻痺せしめ、大衆を敵にまわして罪の意識もない国鉄労組は許せない。米価値上げ要求戦術として、農民が田植ストを断行するに等しい、そんな悪質ストは法律で厳禁すべきである。

国鉄労組の闘争戦術も、直接国民に迷惑をかけず、効果百%の争議行為はいくらでもある。全国一勢の改札ストを執行しても、困るのは国鉄当局だけであつて、効果百%であらうが国民大衆は寸分も迷惑を被らない。タダ乗りも多少はあるうが、どうせ国民の税金で生かされている国鉄であつて禁治産事業、国家損失も大したことはない。

日本の労働組合も、この辺で駄々子の域を脱して、国家の主人公は国民なり、国民の付託を受けた重責を最重点に考えるようになれば、国鉄経営の主権者となるであらう。

全国五千万労働大衆を除外した日本はない。

義務を忘れての権利はなく、国民を敵に廻して勝味はない。この辺で国鉄労組も奴隷根性から反省する時機であらう。

日本の労働運動には、権利の主張だけがあつて、義務の主張がない。これでは進歩がないから必ず行詰る。賃上争議も待遇改善も、無い袖はふれないから、馬鹿をみるのは労働者自身である。

労働争議も真の目的は賃上要求や待遇改善ではなく、搾取なき生産体制と公平な分配要求でなければ意味がない。同一企業体内で苦楽を共にする運命共同体制が確立しておれば、分配金の大小増減は問題ではない。

少なきを憂えず、等しからざるを憂う、キブツに対立も紛争もないのは等しいからであつて、多少に関係はない。

この点で今の日本では、相変わらず旧態資本主義自由主義経済制度を錦花玉条とし、搾取性格をそのまま固執し、当然起る労使の対立を、年中行事の虚々実々のカケ引や妥協によつて、その場その場をごまかして、神聖なるべき労働所得と、アブク銭の不労所得を、同価値として、インフレ化に押流されてゆく、正に働く者の悲劇であらう。

この罪惡に気付かない、日本の労働運動は

はなやかにみえても決して実りがない。そして徒らに近代社会の新客でもある労働貴族を、のさばらせるだけであらう。

三、インフレの元凶は不労所得

一億円を出せば命だけは助かるとなつたら今の日本には、出し手が何十万人とあるであらうが、一億円やるから国のために死んでくれと云われて、ハイと答える人はまづあるまい。

金大中事件以来、週刊誌などに、日韓もし戦わば、九州ぐらいは三日間で占領されるかも知れないと、臆面もなく書き立てていたが飯にそんなことが起つた場合、今の暗成金や土地成金等々が、真先に命を投げ出して貰わないことには、真面目に働いても、働いても一家を支えるのが、せい一パイで青息吐息の一般国民の志気があがらないであらう。

そんな国民感情を軽視した政治や経済を放任することが、何より恐ろしい。思い切つた改革を断行して国民の良心を動員できる体制が急務であり、国防も自衛力も未の未である。資本が、より大きな経済発展のために必要であり、営利の衝動が生産活動の原動力となつている人間社会で、資本そのものを否定す

ものがキブツである。

かくしてキブツは労働の尊厳と労働による創造の喜びを、人間界に回復することができた。それは人間平等観と労働尊重とを二本の柱とした、搾取なき皆労働社会キブツによつて生み出したものである。

キブツは全メンバーが労働者であり全メンバーが経営者であり、そして支配する人も、支配される人もない、皆労働体制であり、搾取も不労所得もない社会であり、すべて一年か二ヶ年交替制の委員によつて民主的に運営されている。

そして生産手段を共有するから、資本は完全に人間が支配できる。財産も共有であるから人間社会最大の不幸であり、罪惡の根元となる不平等社会が是正され、各自その能力に応じて働き、各自がその必要に応じて分配を受け、生老病死の宿命までも共通の苦げんとするキブツこそ人間回復の実現であらう。

資本主義的企業は資本中心であるから、資本に結付いたものが経営者であり、その他のものが労働者となる宿命にある。この両者の対立が企業の進歩発展に障害となつてきている。この欠陥に新しい活路を開くものが、協同体化であり、キブツはその先駆者であり成

功例でもある。

キブツは協同体社会の真価を示し、その主体性の確立が信用力を生み、企業経営に必要な資本を招きよせ、資本を人間に奉仕せしめ得たことが、注目に価するものである。即ちキブツは人間が資本を支配した、いや労働が資本を支配した絶好の見本品でもある。

イスラエル国でも、一般の産業界では、労働者の対立もあり、労働争議もある。また、ストライキも頻発しているが、労使なき経営形体であるキブツには、労使の対立がないか

四、企業も主権在民・民主経営時代へ

『国家の主人公は国民なり』これが日本憲法の骨子となっている。世界各国共その方向に進んでいる。こんな貴重な権利を全く活かし得ず、乞食が馬を貰ったように、もてあましていたのが日本人である。もてあますなら未だよいが、無関心なものが大半であつては、心細いからである。

お隣りの中国でも、中華人民共和国の誕生以来「国家の主人公は人民である」が国の基本であり、中国人民は偉大なる誇りとして感謝し、国家の主人公としての重責を第一義とし

ら、争議もストもない。その長所が生かされて工業への道となり、国の内外から注目されつつある。

このキブツの長所を取り入れた労働組合経営の輸送業、サービス事業なども、イスラエルには発展する傾向にあるというが、これが健全に発展すれば、労使の対立がないばかりでなく、人間が資本支配から完全に脱却することになり、労働者即経営者であり、管理経費不要の企業が成立し、生産手段から搾取や不労所得をなくすることができよう。

ているが、日本人は個人意識だけが助長されて国家意識がうすれている。

中国では国家の主人公が人民であるから、その人民は平等であり、労働尊重を国是として、軍隊までも階級制をてっぱいし、官吏や大学教授でも、一定期間は貧農、下層中農を師として、労働の尊さを身を以て体験し政治の上に反映している。

しかし日本では主権在民も民主主義も、絵にかいた餅で名目だけ、昔のままの貴族、学閥、財閥、成金族が巾をきかせ、位階勲等ま

で復活して、自得心に溺れ放して、これをまた労働階級まで真似をして、労働貴族まで続出している。これでは民主主義の育つわけがない。

民主主義の育たない国に労働運動は育たない。だから、日本の労働運動は、本当に働く人の幸福追求の労働運動でなく、一部野心家の足場としての労働運動化し易いのである。

従つて日本の労働運動には真面目さが無い。特定の野心家の欲望が中心であるから無理がある。その無理が国民大衆を敵に廻す暴挙となりやすい。国鉄労組の順法闘争などが、端的にこれを立証している。

政治運動にせよ、労働運動にせよ、真の目的は国民大衆の支持を得ることにある。また国民の理解と支持なしには、どんな運動も成果をみることはできない。労働組合が賃上げ組合から一歩も進化したくない現状を反省する必要急であらう。

家族国家として発達した日本の伝統には、今も階級意識が根強く残っており、あわい優越感でも大切にしている風習があり、不平等社会を、却つて好んでいる日本人が少くない。一介の労働者であっても、年功序列を重視し、賃金差の中に希望をつなぎ、平等化を好まな

い根強さがある。

そして、貴賤貧富の不平等社会をねたみながらも、その不平等社会を支持しているのは下層労働者であることを、事実によつて知ることができた。そして斯等のこの弱点を握むことで、年中行事の労働争議を乗り切っている名人もある。

先にも述べたように、日本の労働運動が、今日のような利己的な賃上要求や待遇改善要求に終止するかぎり、徒に物価と賃金とのマラソン競争を激化するだけであつて、その被害者は労働者自身と言う愚に終わるであらう。国家の主人公は人民である。その国家を支えているものは、生産労働大衆である。この自覚の上になつた建設的な労働争議でなければ、国民的支持もなく、徒に天に唾する愚に終るのみである。

これからの労働組合幹部は、事業経営学や経済学、社会学を学び、国家の発展方向を見失わない労働運動の指導が必要である。そして一日も早く生産手段の支配権を資本から取り返し、資本を労働に奉仕せしむる方向に導く運動でなければ意味がない。

膨大な管理経費を半減する力量があるとすれば、それはキブツを真似た労働組合経営で

あらう。尚幾多の曲折はあるとしても、労働階級が、搾取の対象から免れる唯一の活路としてキブツは絶対見本であらう。

キブツのマスキールと言へば、日本の町村長にあたり、企業の上では社長格であるが、簡素な事務所労働服姿で、固い木椅子に腰をかけて、忙しそうに執務している様子を見ると、昔の日本の片田舎にあつた村役場みた村長さんである。

そんなキブツの共同施設である、大食堂とか、その他の共同施設をみると堂々たるものであるに反して事務所の簡素さも亜然たるものがあつたが、そこには共同生活体の在り方を無言の内に物語っていた。

キブツ・アキヒムは人口二千人と称せられ農業のほかには、可成り大規模なベニヤ工場を経営しており、年産は日本円に換算して五十億円程度であり、原料は全部アフリカから輸入し、製品は海外輸出もしているときいたが、その事務所の簡素さと、事務担当社員が僅か十名であつたことに些かびっくりしたほどであつた。

もし、これが日本であれば、事務所は堂々三階五階の鉄筋コンクリート建、社長室あり専務取締役室あり、立派な応接室ありで、事

務員も五、六十名を下るまい。この皆労働体制のキブツ方式をみて深い感銘をおぼえたのは理由があつた。

もう四十年前の昔話になるが、偶然の一致であらうが私の日高電灯株式会社の経営方式がキブツ方式そのままであつた。当時の北海道日高地方には電灯もなかった。何分にも海岸線が二百キロもあり、各町村を結ぶ電線路の建設に巨費を要すのに、電柱一本当り電灯数は一灯強にすぎなかった。こんな不利な事業の引受け手がなく放置してあつた地域であつた。その時私は三十五才の血気さかり、冒険心もあつて犠牲を覚悟で建設経営を引受けしてしまった。当然のことながら、赤字経営六年、尋常の手段で維持できる事業ではなかった。

そこで考えたのが、管理経営なしの皆労働体制であつた。社長も技師長も、事務長も昼は労働、夜は事務、集金係もするし、電柱に昇る修理仕事もする。右に習えて全従業員が無中で働いてくれた。

苦難十年にして日本一の新記録を三ツ樹立した。一、電灯料収金率九八%。一、定額高燭電球六〇ワット平均。三、無事故三年の確立。そして優秀事業として北海道十七社中第一位

となつたのであつた。

これは窮余の策として断行した、苦難の体験であるが、キブツでは六十年の歴史をもつて人間社会の理想の姿として大成している。やがて、人類社会の生活哲学として、普遍化するであらう。

五、甘い考えで

乗切れる日本ではない

日中国交正常化、八億中国と仲良くすることに、日本人の誰一人として異論はあるまい。その後、貿易の拡大も順調であり、文化の交流もいよいよ盛んであり、万事目出度し目出度しではあるが、やはり気になることが一つある。それは思想も人心も天地雲泥の差のあることだ。

臥薪嘗胆、綿服一色、八億一心皆労働、人民中心の勤劳大国中国と、昭和の元禄、成金全盛、一億一億心の対立社会、不勞所得中心日本とでは、固い握手にも何か不自然な無理が氣になる。両国間の貿易や文化交流では国情の相違も何とかならうが、こゝ国際間の問題となると、そう簡単ではない。

南北朝鮮問題一つ考えても、頭が痛い。東亜各国では華僑との関係もあつて一層ふくざつてあらう。アフリカでも同じである。国家性格も経済体制も相違するので、忽ち対立激

化が起り易い。時代逆行の日本資本主義の歩む方向が氣になることばかりである。

工業立国日本は八億中国の存在が生命線であるが、中国の存立発展には必ずしも日本を必要としない。その上に八億の影響力は一億のその八倍である。社会主義中国の思想文化をどう受けとめるかが、日本最大の今後の課題であらう。

今後の世界は、米中ソ三国程度の国土と資源と人口とが、独立国家の資格条件となる時代である。それ故に欧州連邦の実現も遠くあるまい。その他の小国は大国への依存度が存立の絶対条件となる宿命にある。

そして、新時代の世界は太平洋が中心舞台であらう。米中ソ三大国の扇の要の位置にある島国日本の立場は、右するも左するも静止するも不可。恐ろしく難しい立場に立たされている。その困難さを知らぬ顔の半平さんが、いまの日本人であらう。

どんなに間違つても、今の中世紀的、保守主義的、不平等社会国家のままで、安泰の許される国際環境ではない。足下で火を吹いても只傍観する外はない。南北朝鮮の確執を考えただけでも、太平洋の要の地位が難しい。

今日以後の日本は、一億一心一体化して、

どこからも犯されもせず、犯しもせず、不変不とう、厳然として生き抜くためにも、新憲法に基づく主権在民、民主主義日本の実現を期し、先づ若者の心奥に国運の重責を負う国民感情の培養が急務であらう。

アメリカ東亜政策の尻馬に乗って二十余年、そのアメリカがドル危機に陥るほどの大乱費の恩恵に浴して発展した日本工業、未曾有の成金国となつた日本では、質素勤勉の美風で定評のあつた農村までが、農民自身が啞然とするほど、贅沢三昧、遊蕩気分に一変して乱費の上客として農協さんの名声はバリ、ロンドンまでも鳴りひびいている。

奢る平家の二十年、年貢の納めどきがそう遠くはあるまい。昭和の元禄、成金日本でも金運のない働き蜂階級が、全国民の七十%を占めている。その働き蜂階級は物価と賃金とのマラソン競争で奔命に疲れている。

労働を生産のための必要悪と考えざるを得ない資本主義、国民の大半を搾取や不勞所得の餌食とするような資本主義性格、それを政治力で改めることは容易でないが、人間が資本を支配する民主主義体制なら、キブツを真似ることで、新活路がある。